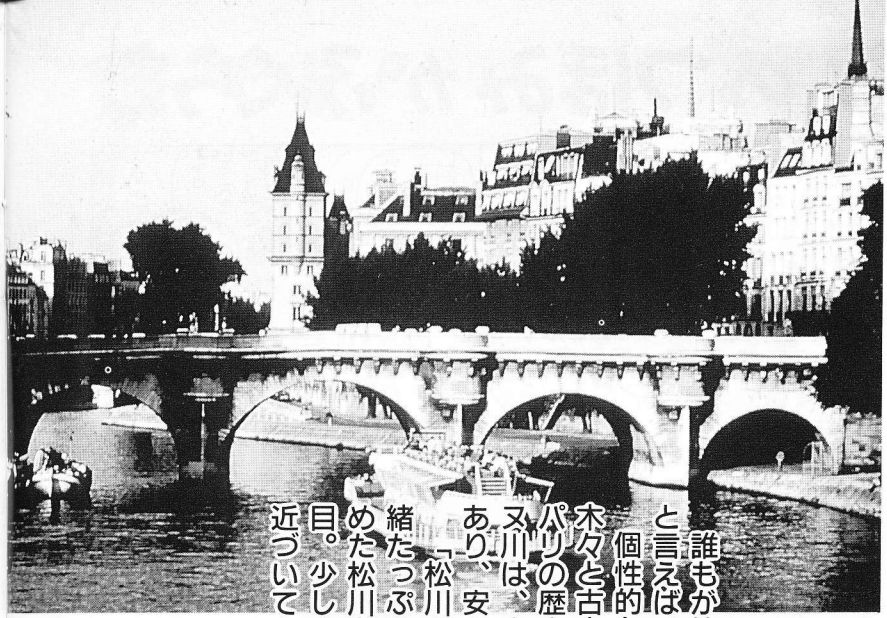
◆街づくりキャンペーン　◆水と緑と文化の街をめざして

セーヌの流れと松川の魅力を探る！



誰もが憧れるリバーフロントと言えば、パリのセーヌ川。個性的な橋、川岸のマロニエの木々と古本屋、そして遊覧船…。パリの歴史とともに流れるセーヌ川は、市民の〝生命（いのち）の川〟であり、安らぎの場でもある。

「松川をセーヌ川のような情緒たっぷりの川にしたい」と始めた松川遊覧船も、今年で7年目。少しずつではあるが、夢に近づいてきたようだ。

パリの命・セーヌ川

パリの大動脈、セーヌ川。両岸には、ノートルダム寺院を始めとする数々の歴史的建造物が立ち並び、この川がパリの文化の源であることを感じさせる。

しかし、最も魅力的なのは、セーヌ川を愛する市民の心である。釣糸を垂れる人、それを飽きずに眺める人、小犬を散歩させる女性、日光浴を楽しむ若者、読者にふける人、そして愛を語らう恋人たち…。春の訪れとともに、セーヌの川べりは大勢の人々で賑わう。

観光客がどっとくり出す盛夏は、川全体が昼夜を分たず活気に包まれる時。満員の遊覧船が行き交う中、昔ながらの河船が通り過ぎる光景も趣深い。

憧れの川

富山市長であった故・改井秀雄氏は、「市長雑感」を綴った著書『松川べりにて』（1972年2月発行）の中で次のように述べている。

「松川にはもっと水を、いたち川はもっと環境の整備を急がねばなりません。ロンドンのテームズ川、パリのセーヌ川をあげるまでもなく、都市は川の復活に全力をあげています。人がそこからうける無限のやすらぎを知ったから。神通、常願寺、白岩はいうもおろかなり。松川、いたち川の整備を急ぎたい。水と緑のいこいの場として」

「パリのセーヌ河は、川幅が松川の二～三倍はあるようでしたが、散策を楽しでいる人、画架を立てて絵筆をとっている人、ベンチで頬を寄せ合っている若い人たち、という風景は忘れることのできない風情のある一コマでした。（中略）街にはそれぞれの風情や風格があってあたりまえでしょうが、大部分が消失したとはいえ、二十数年を経た今日、富山市にもそういう自然の風格が出るように街を手がけてゆかなければならぬのではなかろうかと思っています」

松川を、こよなく愛した改井氏。あとがきも「四季おりおりの風情を、そして時の流れを川面に映しだしてくれる〝松川〟を私は好きです」という一文から始まっている。

そんな改井氏が、松川の理想像として思い描いていたセーヌ川。川の大きさや長さよりも、その風情が心を強く打ったのである。

パリの街に安らぎと潤いを与えながら、セーヌ川は今も流れ続けている。その素顔に、少し迫ってみよう。

▲過去と現在が息づく街、パリ。セーヌ川はその歴史を映しながら、移りゆく時とともにゆったり流れている。

㈱朝日印刷紙器

川からパリを見る

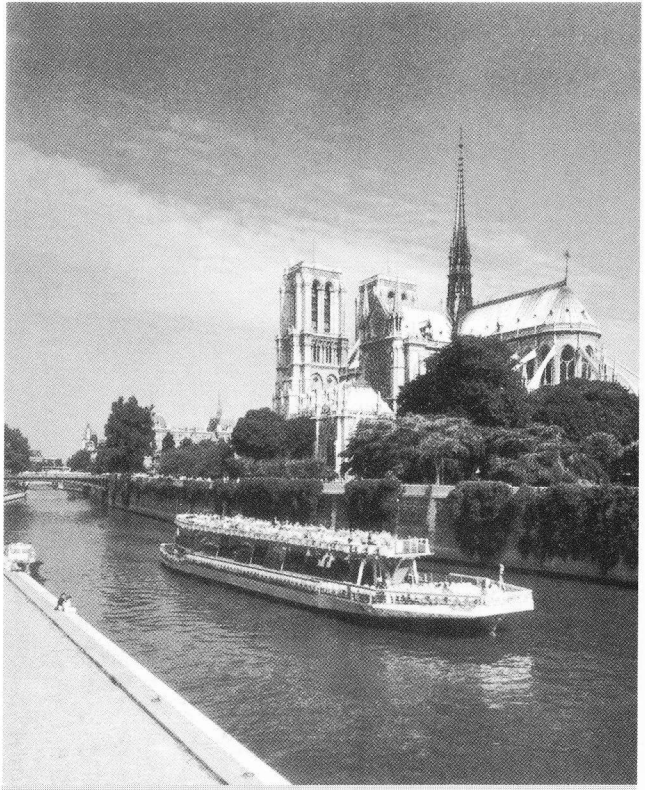
母なるセーヌの川から生まれた街、パリ。それゆえに、船上から両岸の街並みを眺めることは、パリの歴史や文化を肌で感じ取る最も有効な手段と言えるかもしれない。

セーヌ川には大小の遊覧船が行き交っているが、その中でも有名なのはバトー・ムーシュ社の大型船。ランチやディナーを食べながらの川下りは、観光客に大人気だ。

最も眺めが美しい場所と言えば、川に浮かぶシテ島とサン・ルイ島。ノートルダム寺院やサント・シャペル（礼拝堂）、そしてフランス大革命時にはマリー・アントワネットも収容されたコンシェルジュリー（監獄）など、歴史的な建造物が数多くある。これらの島を中州としてセーヌの流れは二股に分かれており、下流で再び合流。パリの紋章はセーヌ川に帆船が浮かんでいる図柄で、「たゆたえども沈まず」という銘句を伴っているが、この帆船はパリ発祥の地・シテ島を表しているそうだ。

名橋の数々

ガイドさんの説明を聞きながら遠い昔に思いを馳せ、川風に吹かれていると、船は大小さまざまな橋をくぐりぬけて進んで行く。セーヌ川には全部で32の橋が架かっているが、どれも美



▲ナポレオンの載冠式も行われたノートルダム寺院と、バトー・ムーシュ（遊覧船）。真夏になると、世界各国の観光客で船は満員になる。

越路銘菓
とこなつ
本舗 大野屋
高岡・富山・金沢

しく個性的な橋であり、まさに芸術の都・パリにふさわしい。

アポリネールの詩であまりにも有名な「ミラボー橋」や、最近映画にもなった「ポン・ヌフ」、そして川の水の精をレリーフにして、ロシア皇帝から送られたきらびやかな「アレクサンドル三世橋」などが代表的であろう。船からしか見えない橋の下のデザインも、非常にみごとである。

街を愛する心

セーヌ川沿いでは、非常にしっかりとした河川景観の整備が行われている。例えば、川岸やその背後にある建築物の高さの規制。これは、美しい教会の塔や山々の木々が船からも見えるようにと配慮されたためだが、その心くばりの細かさにはただただ驚かされる。

そして、これを支えているのは、パリをさらに素晴らしい街にして行こうという市民の情熱である。『川から発想するまち～第三回九州河川シンポジウムからの提言～』の中で、田中充子氏は次のように語る。

「私は八年ほど前にパリに行って、パリ市の都市計画課を訪ねたことがあります。その当時、八つのビッグプロジェクトが八冊の立派な本になっていて、それをいただいてきました。（中略）係の人が一生懸命説明してくれるわけです。ラ・ビレットも再開発しますよとか、オルセーの駅も美術館に変わりますよという。そんなにパリの財政が豊かであるわけがない。今でも十分、パリは花の都として世界に鳴りひびいているじゃないか、これ以上何をすることがあるんだろうと思っていました。それが、二・三年前から全部実現してきています。すばらしいエネルギーだと感心しました。だから、ウォーターフロントの整備にしても、文化施設にしても、橋もすべてが芸術で、パリの手にかかるとすべてがそんなふうになってしまうことに驚きを感じたわけです」

セーヌ川を中心に、独特の風情と風格を保ち続ける街・パリ。岸辺を歩いていると、アナトール・フランスの言葉が実感として思い起こされる。

「ルーブルや、チュイルリーの宮殿を正面にみて、昔ながらのパリの大小さまざまな塔、尖塔を縫って流れるセーヌ川の美しい岸辺にたち、近くにはマザラン宮を眺める、そういうパリの河岸通りに生まれ育った人が平凡で陳腐な心を抱こうなどとは、まず私には考えられないことである」

街を愛するパリ市民を創ったのも、母なるセーヌ川なのだ。

▲駅が美術館に生まれ変わった「オルセー美術館」もセーヌ川沿いにある。19世紀から20世紀にかけての美術品を収蔵。

サクラパックス㈱

松川べり

情緒豊かな松川

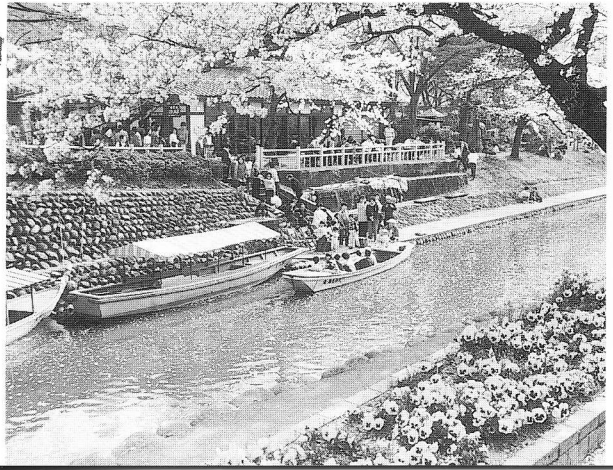
理想的なリバーフロント、セーヌ川。フランスの首都を流れる川であり、規模的にもかなり大きいが、独自の歴史と良さを生かした、風情たっぷりの光景には見習う点が多い。

富山市の〝動脈〟である松川はどうだろうか。先に改井元市長の言葉を取り上げたが、その頃に比べると川の水もずいぶんきれいになり、遊歩道、ぼんぼり、彫刻、親水のにわなどが一帯に整備された。また、昔ながらの笹舟による遊覧船も運行を開始。これに伴い、「舟橋」「七十二峰橋」も、川からの視点を大切にしたユニークな橋に生まれ変わった。

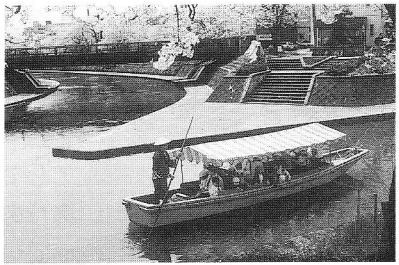
そして、なんといっても松川は、四季折々に変化する両岸の桜並木が美しい。川幅が狭いため、舟はまるで桜のトンネルをくぐり抜けるように進んで行くが、まさに富山ならではの情緒ある光景だといえるだろう。

色とりどりの錦鯉が群遊し、彫像のようにじっと立っていたサギがパッと飛び立つ…。セーヌ川のような壮大な眺めはないが、松川には美しい自然があるのだ。

▲舟橋とモダンな彫刻



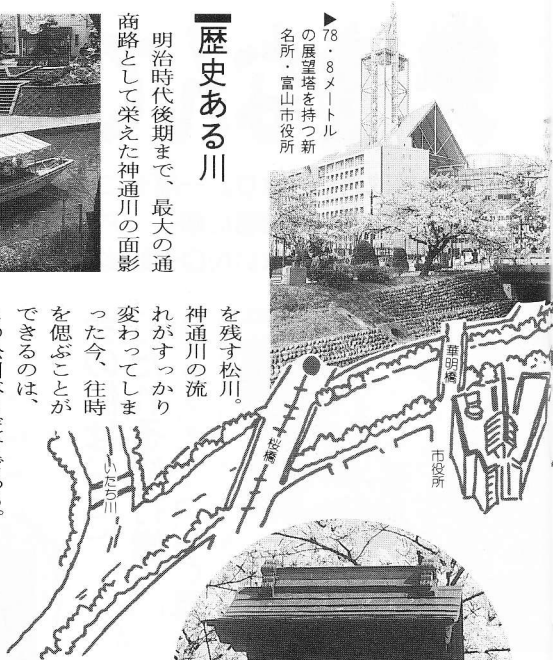
▼いたち川との合流点



歴史ある川

明治時代後期まで、最大の通商路として栄えた神通川の面影を残す松川。神通川の流れがすっかり変わってしまった今、往時を偲ぶことができるのは、この松川べりだけである。

富山城の横を滔々と流れ、何度も洪水を引き起こした川。64艘の笹舟をつないだ舟橋が架けられていた川。そして、魚、塩、薪、酒などを積んだ舟が往来していた川。富山の歴史とともに歩んできた神通川の姿が、ひっそりと息づいている。



▶78・8メートルの展望塔を持つ新名所・富山市役所

橋の由来

【桜橋】富山10代藩主・前田利保が隠居所として千歳御殿を建立し、多くの桜の木を植えたことによる。

【華明橋】明治以降、桜木町が華やかになり、ぼんぼりの灯も明るい歓楽街となったためと言われる。

【塩倉橋】富山藩の塩の倉があったことから命名された。

【七十二峰橋】平成3年に、ステンドガラスの美しい橋に架けかえられた。橋上にたたずみ、はるかに東を望む時、立山七十二峰の雄大な景観を眺められることによる。

【安住橋】神通川を利用し、天然の要害を周囲にはりめぐらしていた富山城が、安住城、または浮城と呼ばれていたことによる。この橋は、富山城址と神通川が最も接近した場所に位置していた。

【舟橋】軍事上の目的もあり、64艘の舟を一列に並べ、その上に板を敷いた舟橋が架けられていたことによる。往時を偲ばせる常夜燈も残る。

▶神通川（今の松川）にいたち川がそそぐ場所は、木町の浜と呼ばれ、魚・塩・薪・酒などを積んだ船が荷おろしをした。今は、常夜燈だけが当時の面影をとどめている。

松川の風情を生かそう

水は命の源であり、川を抜きにして街の歴史は語れない。それゆえ、川は人間の営みを映し出す鏡であるとも言えるだろう。

セーヌ川を遊覧船で下る時、パリの歴史が見えてきたように、松川の船上からは富山の歴史を偲ぶことができる。また、季節ごとに変化する川べりの自然は人々に潤いを与え、詩情を誘う。

全国をまわっているカメラマンに絶賛され、海外に詳しい人にも「ブルージュ」（北のベニスと呼ばれる水都）に例えられた松川。今後も、より一層の魅力づくりが求められている。

資料提供／フランス政府観光局
参考文献／『松川べりにて』（改井秀雄著）『川から発想するまち』（建設省九州地方建設局監修）